

求道俳句誌

余白の風

二〇一六年三月号
第二一九号
奇数月二〇日発行

発行と一
幸白栄
主余平
余田栄

俳句や短歌をつくりながら、「南無アツバ」の心を養います。

会員作品のエッセイ *選評)

高知・赤松久子

太陽が老いて地球も死するとか
メフィストの甘きささやきぞぞろ寒
大津波悪魔の仕業かい間見る
ふと見えし心の闇よ冬薔薇
草紅葉まずは唱へむ南無アツバ

*老病死そして災害。この世の「闇」は尽きない。しかしよく見ればその闇に咲く一輪の「冬薔薇」、輝く「草紅葉」——福音の逆説に「南無アツバ」

練馬・魚住るみ子

窓に写る幼き顔よ南無アツバお迎へを待
つ保育園児たち
追ひ越して遠ざかりゆく子供自転車風光
る道南無アツバ
立春の暁をわが女の曾孫春の姫君誕生し
たり南無アツバ
『風の道』
花の雲幹太ぶとと老桜うねれる腰に白緑
の苔
夜を冷ゆるみちのくの大地幾春を枝垂れ
桜の大樹咲き継ぐ

*「保育園児」「子供」「曾孫」、作者のあたたかなまなざしが幼子に注がれている。時代をこ

えて「桜咲き継ぐ」希望は永遠に。

名古屋・片岡惇子

限りある時を遊びし雪飛翔
生かされし命の色の薄氷
留守電に無事生まれたと春の雪
音訳の声それぞれに花芽吹く
桜色の爪を翳して命見る
春浅き主のみ言葉に立つさざなみ

*「生かされし命」は「限りある」からこそ輝く。そして生き継ぐ。老い往く命は新たに「生まれる」命にバトンを渡し、自ら輝く。その気づきが与えられる時——福音。

豊田・佐藤淡丘

アネモネや風を信じて揺らぎをり
星のごと土手を駆け上ぐいぬふぐり
沈丁の闇を潜りて匂ひぬる

「遠藤周作を読む会」の例会で、作品の中に潜む「後めたい」というキーワードに話題が集中、キリスト者としての回心を含め、四旬節にふさわしい心の究明のよすがともなりました。因みに広辞苑によると、「後の事が気にかかる」とあります。まさに気にかかる「であい」が今も続いています。

*「後ろめたさ」という、一見マイナス・イメージの言葉に、プラスの「よすが」を見る。それが福音との「であい」につながる。キリスト教的な、よい学びをされています。

『都市群像』・島一木

六月やミサに行く母杖をつき
説教にパンのことあり蟻の道

*カトリック信者にとつて「ミサ」は日毎の、あるいは週毎の「パン」。老いるほどに喜びをもってミサに与る姿が彷彿する。

「日矢」六二七六一四号・新堀邦司

もう誰も攫つてゆくな虎落笛
二人目の孫賜りぬ菊日和
家々は南を向きて小春かな

*禍福は糾える縄の如し。笑える時は泣く時が来ることを、泣く時は笑える時が来ることを忘れないように。

一宮・西川珪子

穏かな一年であれ初暦
前見えぬ吹雪に祈る南無アツバ
歪多き地球に水仙生きてゆく
山茶花の重なりて散る無音なる
暖冬の地面の動く土竜かな

*「穏かな一年」を誰しもが祈る。しかし、どんなに時代が進歩しても、雨風の止む年はないならばこの世から出るか。そうではない。この雨風の中に留まって希望の道を見つける——イエスの福音。

蓮田・平田栄一

主にありて常に喜べ浮寝鳥

フィリピ4・4より。お馴染みの聖句ですが、これがなかなか難しい。たまに、時々、は喜べても、しばしば、常に、となると自信がなくなってくる。そう思ったときももう一度聖書を見る。ありました！どんな時でも喜べる根拠が。次の5節「…主はすぐ近くにおられます！」

主と負える十字架軽し冬日向

マタイ16・24より。イエスは人には皆「日々」(ルカ) 背負うべき「自分の十字架」がある、と言う。「十字架」と聞けば誰でも腰が引ける。しかし、イエスが「ついて来い。従いなさい」と言うとき、主がすぐそばにおられ、共に荷われるということ忘れてはならない。

平田講座要約(第40回)

(テキスト『心の琴線に触れるイエス』聖母文庫) サンドメルは(その趣旨に賛成する井上神父も)、パウロがエルサレムの伝統的保守的なユダヤ教へブライストではなく、ヘレニストIIディアスポラ、ギリシア語系ユダヤ人という出自に注目します。そのパウロがキリスト教に改宗したので、そこからパウロ神学が異邦人伝道——世界宗教へと発展していく素地ができたのである、と推測します。そして、そういうパウロがいなければキリスト教はこんなに広まらなかったであろうと。

本題に戻って、石川耕一郎氏は、日本人を意識した伝道という点では、北森・井上は共通項がある、と言います。しかし、じっくりキーワードとしての「悲愛」と「神の痛み」を比べてみると、むしろ対極にあるものが見えてくる、というのです(くわしくは後述)。

p・51

また、ピエタをはじめ芸術面では西欧にも、はつきりと神の痛みが歴史的に表現されてきたことを考え合わせると、「神の痛みの神学」が必ずしも日本的だとはいえない、とした上で、北森神学を次のように分析しています。

西欧にも「神の痛みの神学」がある、ということですが、青野太潮流にいえば、「神の痛み」というのは、直接的に言えば「イエスの十字架」のことではないでしょうか。ルターが初めて「十字架の神学」という言葉を使った人なのですが、この「神の痛み」としての「十字架」を、イエスの「死」と合わせて——伝統信仰同様——贖罪論に持つていつているのが、北森神学と言えるように思います。しかし青野氏は、「新約聖書にイエスの十字架による贖い」という表現は皆無！(展開p・32)といっています。

すなわち、伝統的に「贖い」はイエスの「死」に結びつけられてはいますが、「十字架」への言及は皆無だということです。「十字架」はパウロにとって特別な、別の意味を持っていた。なぜ、パウロ以前の教会は「十字架」に眼をつぶったのか？ それは自分たちの罪の贖い、ということだけでは、あまりにも十字架は悲惨だったからです。

この点、井上神学は「イエスの十字架の死」と、青野さんのように「十字架」と「死」を區別はしてはいませんが、伝統的な教会信仰のようにならざるを得ない、と結びつけてはいません。

例として、次の箇所をあげます。

「わたしたちはこの句(裏を見せ表を見せて散る紅葉 良寛)から、やはり思い出すのは、

イエス様の生涯です。(続) v(1994年「聖書講座」テープより) 『すべてはアツバの御手に』 p・148(9)

南無アツバの集い&平田講座、於：四谷ニコラバレ、日時3/26(土) 13時半、4/23(土) 同

平田栄一新刊『南無アツバ』への道

『南無アツバ』への道

井上洋治神父の言葉に出会うIII

平田 栄一



聖母文庫

『心の琴線に触れるイエス』『すべてはアツバの御手に』に続く、「井上洋治神父の言葉に出会う」第3弾！『ルカによる福音書』18章A「フアリサイ派の人と徴税人」のたとえvをめぐる考察から、少しずつ見えてくる、イエスのまなざし。そのまなざしにゆだねることににより悲愛へと導かれる、日本人キリスト者・求道者の生き方を模索します。

(定価800円+税。聖母文庫 ☎095・824・2080。サイン本ご希望の方は平田までご連絡ください。送料込み千円)

「余白の風」入会案内

どなたでも参加できます。購読のみ可。*年六回奇数月発行*年会費千円(送料共)*採否主宰一任*締切日偶数月二十日*投稿先 フログ「南無アツバを生きる」
<http://yohaku5.blog.fc2.com/> 余白メールbox